

日本における天妃信仰の展開とその歴史地理学的側面

高橋 誠 一

Historic Geographical Profiles of the Belief in Voyage Goddess (*Tenpi*) in Japan

TAKAHASHI Seiichi

Mazu is known as the Voyage Goddess among the common people in East Asia and Southeast Asia today. Though the Mazu belief was initially confined to the coastal areas in Southern China, especially in Fujian Province or Guangdong Province due to the strong association with voyages, the sphere of the belief expanded since it was gradually thought to be beneficial to other things but voyage. Mazu was embraced by Tenpi in the Qing Era and Tengu in the Yuan Era, and “Tenpi Temples” and “Tengo Temples” honoring Mazu were widespread and diffused not only to the coastal areas in southern China but also to East Asia and Southeast Asia. When the Mazu belief was introduced to modern Japan, it was connected with the belief of Funatama (the guardian deity of ships) and spread. In this report, the Mazu (Tenpi) belief, which gradually changed with the development, diffusion and spread of the belief, is considered from the viewpoint of historical geography.

キーワード：天妃，媽祖，琉球，那覇市唐栄久米村，長崎唐人屋敷，文化交渉

第一章 日本の媽祖信仰に関する研究

(1) 媽祖と天妃（天后）

媽祖は、東アジア世界や東南アジア世界において、今日でも一般庶民に知られる航海の女神である。宋代に実在した中国福建省興化府の官吏の娘である默娘が神になったとされる。伝承によれば、彼女は10世紀の半ばに生まれ、幼少のころから才気煥発であったが、16歳のときに神通力を得て数々の奇跡を起こすようになり、「通賢靈女」とあがめられるようになった。ところが28歳のときに父が海難にあって行方知れずになってしまった。悲嘆にくれた彼女は旅立って、眉山山頂で仙人に出会って神となったとされる。父を探す途次に遭難し、福建省の媽祖島にうちあげられたとの伝承もある。

当初の媽祖信仰は、航海との強い関連で、特に福建省や広東省の中国南部沿岸地域に限られていたが、次第に航海以外のことにも利益があると考えられるようになり、その信仰圏も拡大していった。元代に

は天妃に、また清代には天后に封じられ、媽祖を祀った「天妃宮」や「天后宮」が中国南部の沿岸地域のみではなく、華北や東北地方にも建てられるようになった。

とりわけホンコンやマカオでは文化大革命の影響を受けなかったこともあって、媽祖に関する信仰は現在も盛んである。ホンコンの赤柱（スタンレイ）の天后廟やマカオの媽閣廟は特に有名で、観光名所ともなっている。また仏堂門天后廟（大廟）、車公廟、文武廟、黄大仙廟などもある。さらに台湾は、中国南部からの移住者が多いこともあって、媽祖信仰はきわめて盛んである。台湾最初の官建「天后宮」は、台南市にある大天后宮で国家一級古蹟に指定されているなど、台湾では最も親しまれている神と言われることも多い。旧暦3月23日の媽祖の誕生日には台湾全土の媽祖廟で盛大な祭りが開催されている。

日本に伝来してきた媽祖信仰は、船玉信仰や神火靈験譚と結びついて伝播していったが、江戸時代以前の媽祖像は南薩摩を中心として30例以上確認されている。

（2）藤田明良氏による天妃研究

日本における天妃研究については、藤田明良氏の詳細で重厚な研究がある¹⁾。藤田氏の「日本近世における古媽祖像と船玉神の信仰」は、日本の媽祖信仰研究をたどったのちに、その伝播と展開を検討し、媽祖信仰が日本的に展開していったこと、また船玉神としての媽祖の受容・展開とその終幕を論じたもので、「日本列島媽祖信仰参考文献一覧」、「日本所在の古媽祖像一覧表」、「図版・日本の古媽祖像と船玉神像」を収録したもので、当該の研究テーマにとって、最も重要な研究のひとつであると位置づけることができる。

藤田氏の研究はまず、これまでの日本における媽祖信仰研究を跡付けることから始められる²⁾。それによれば伊波普猷氏による「おなり神」（『民族』2-2, 1922）に始まって数多くの研究が蓄積されてきたことがわかるが、本格的に多くの研究が累積していったのは意外なほどに新しい。すなわち主として1980年代以降に活発な研究の進展があったことが理解できる。

次いで、藤田氏は、第一章「媽祖信仰の伝播と展開」として、「日本への媽祖信仰の伝播と古媽祖像」について、中国との冊封関係にあった琉球の唐栄久米村の2例と久米島の事例を論じ、中国からの主として鹿児島県への移住と媽祖像の伝来、さらに鎖国後の長崎貿易に伴う媽祖像がたどられている。次に「媽祖信仰の日本的展開」について、沖縄における媽祖信仰の土着化の例として宜野湾市や八重山諸島・慶良間諸島などの例があげられ、鹿児島県野間半島の媽祖権現、長崎県野母半島の日の山権現、東日本の天妃信仰などに関する論述が続けられている。さらに第二章では「船玉神としての媽祖の受容」が論じられる。日本列島の船乗りたちの間では、古くから「船玉」（船の魂・霊）を祀る船玉信仰があったが、

1) 藤田明良「日本近世における古媽祖像と船玉神の信仰」、(中央研究院人社中心亞太區域研究專題中心編『近現代日本社會的蛻變國際研討會論文集』所収、中央研究院人社中心亞太區域研究專題中心、2006年12月)、1-36頁。

2) 藤田氏論文の「日本列島媽祖信仰参考文献一覧」には、57執筆者による69編の著書もしくは論文が収録されている。これによれば、伊波普猷(1922年)、宇宿捷(1936年)、小葉田淳(1947年)など、研究の開始時期は古く遡るが、その多くは比較的最近のものである。ちなみに1950年代は2編、60年代は5編、70年代は6編、80年代は10編であるのに対して、1990年代には23編、2000年代の5年間だけで21編もの業績があげられている。

近世になると「船玉」を具象化した人形や髪の水、賽、古銭などを帆柱の基部などに埋め込む造船儀礼が行われるようになり、これと並行して船の守護神、海神として古くから信仰の対象とされてきた神仏と結び付けて、舟神、船神、船玉神、船玉宮、船玉明神、船玉権現、船玉菩薩などの信仰が顕著になっていった。このような信仰と媽祖信仰との関係について、「近世文献にみえる船玉神と媽祖」、「大坂にあった媽祖伝承と媽祖像」、「媽祖をモデルとした船玉神画像」として検討が重ねられ、最後に「船玉神としての媽祖信仰の展開と終幕」として論文が集約される。全国市場形成に伴う航海の長期化によって船乗りたちは、より高い靈驗を持つ海神を希求していった。また船の経営も船主と船長・船員が分離され、両者が契約関係で結ぶ「船祝」のような儀式が重要な意味を持つてくるというような動向の中で、中国生まれの海の女神である媽祖が、船の安全を担う新たな船玉神として各地に受容されていったが、江戸時代末期の国粹主義の高揚に従って媽祖を船玉神とする信仰が次第に姿を消していったと結論付けられている。

第二章 天妃宮の分布と立地

(1) 日本列島における天妃像の分布

以上、ごく簡単に藤田明良氏の論文を紹介したが、当該論文の「日本所在の古媽祖像一覧表（2006年6月現在）」には、38件の古媽祖像が収録されている³⁾。もっとも38件という数値の中には、以前は存在していたことが伝えられているが、現存しないものや不明のものも含まれている。また非常に詳細な資料ではあるが、確定的な数値ではない。今後の調査によって新たに判明する場合も想定できるし、後述するように、沖縄県那覇市の上天妃宮のような事例もある。すなわち上天妃宮の場合は、藤田氏の表には古い媽祖像が存在しないから当然ながら記載されていないが、かつては存在したことは間違いがない。ところが天尊廟に新たに祀られるようになった天妃像があり、かつそれは古媽祖像ではないからおそらくは混乱を避けるために表から除外されているわけである。したがって、藤田氏の表のみをもって確定的なものとは言えないのである。しかし、現段階で、最も正確な古媽祖像の分布を集約したものであることは疑い得ない。

当該の表に記載されている38件は、以下の通りである。

沖縄県 那覇市（県立博物館）、久米島町（天后宮）

鹿児島県 南さつま市に6例（笠沙公民館、旧野間権現社西宮）、（笠沙公民館、片浦・林家旧蔵）、（坊津歴史資料センター輝津館、坊津泊・有馬家旧蔵）、（坊津・早水家）、（加世田益山・寺園家）、（加世田小松原・中村家）、いちき串木野市（島平・照島神社旧蔵）、穎娃町（現南九州市穎娃町、穎娃歴史資料館、石垣・浜田家旧蔵）、肝付町（旧高山町後田・林家）、霧島市（国分・林家旧蔵、現在不明）

3) 書かずもがなのことではあるが、藤田氏の論文に収録されている表には古媽祖像について番号が記載されているが、その番号は1～39とされている。しかし、番号14と番号16の間の15が欠落している。単なるミスであって藤田氏の表の重要性にはなんの瑕疵もないが、筆者も一時誤解していたので、念のために付記しておく。

- 宮崎県 宮崎市（清水・松井家）、都城市大王町（天水気・市教育委員会）
- 大分県 臼杵市（野津町筒井・赤嶺家）
- 長崎県 長崎市に12例（寺町・興福寺に2例）、（鍛冶屋町・崇福寺に2例）、（筑後町・福濟寺、長崎歴史博物館）、（玉園町・聖福寺に3例、長崎歴史博物館）、（館内・旧唐人屋敷・天后堂に3例）、（長崎大学図書館）、平戸市に3例（川内・観音堂）、（岩の上町・最教寺に2例）
- 福岡県 （九州大学附属図書館）
- 大阪府 藤井寺市（道明寺八幡宮）
- 茨城県 水戸市（八幡町壽昌山祇園寺）、大洗町（磯浜天妃山、現存せず）、北茨城市（磯浜天妃山・弟橘姫神社、旧天妃神社）、小美玉町（小川・旧天聖堂墓地内）
- 宮城県 七ヶ浜町（松ヶ浜・吉田家、旧御殿崎稻荷神社）
- 青森県 大間町（大間・稻荷神社）

これらの天妃像（媽祖像）の分布を示したのが、図1「日本所在の古媽祖像一覧（2006年6月現在）（藤田明良氏、2006年12月による）」である。藤田氏作製の表には、媽祖像の総高や製作地、及び待臣、千里眼、順風耳などの他像、並びに詳しい備考が記載されているが、この表では省略しているし、市町村合併による地名表記などの変更を及ぼしている。

図1を見ると、最も顕著な特色として、九州に稠密に分布していることがわかるが、その中でも、鹿児島県・宮崎県すなわち南九州における高密度の分布傾向と、長崎における高密度分布の二つの傾向があるように思われる。南九州における稠密さは、後述の石敢當分布と相通じる中国華南地方発信一琉球経由の伝播の流れを想起させるが、長崎における稠密さは、長崎唐人屋敷地区の天后堂に象徴されるように、長崎に居住した唐人の影響と、長崎貿易における天妃と船玉神の融合として理解できるであろう。

これら媽祖信仰の日本における展開に関して言えば、中国との関係の強固であった琉球だけではなく、九州や東日本の天妃信仰などに関しても、藤田氏は多面的な考察をしておられる。藤田氏の調査によれば、前記の38件の像のうち、沖縄と九州各地にあるもののうちで、南さつま市旧野間権現社西宮、南九州市旧穎娃町石垣・浜田家旧蔵、都城市大王町の3例以外は、中国製であるとされている。ところが、九州以外の媽祖像については、藤井寺市、北茨城市、小美玉町、大間町のものは、日本近世の製作になるものと推定されていることが注目される。

これら東日本への媽祖信仰の伝播については、17世紀末に水戸藩主の徳川光圀が茨城へ招聘した中国僧の東臯心越の影響が伝えられている。東臯心越は水戸の天徳寺に住し、元禄8年までこの地で過ごした。天徳寺はその後、壽昌山祇園寺と改め、心越禅師を開山とする曹洞宗壽昌派の本山となった。この心越が中国から持参していた天妃像の由来を水戸光圀が聞き、1690年に水戸の外港である那珂湊対岸の磯浜（現大洗町）の小高い丘陵に天妃を祀る「天妃山媽祖権現社」を建立したとする。また同年に茨城北端の磯浜（現北茨城市）の海に突き出た小山を天妃山として、ここにも天妃を祀る天妃神社を創設したと伝えられる。さらにその後、那珂湊沖で遭難しかけて助かった大間の船が、下北半島の大間港に天妃信仰を伝えて天妃媽祖権現が建立された。明治期に大間町の稻荷神社に合祀されて、媽祖像も稻荷神社境内に保管されている。また宮城県七ヶ浜町の御殿崎の天妃画像は磯浜の天妃神の靈験を聞いた仙台藩士によって祀られたということも述べられている。要するに、東日本における媽祖信仰は、水戸が発

信基地となって広がったもので、後述の地形図上の分布調査からも明らかなように、海上や港からよく見える、いわば本来の立地の原則に則っていると見てよい。

またさらに、長崎貿易における船玉神との混淆とは異なって、東日本においては、弟橘媛との混同もしくは混淆という現象も注目される。言うまでもなく、弟橘媛（弟橘比売命）は、ヤマトタケル（倭建命、日本武尊）の后で、『日本書紀』、『古事記』、『常陸国風土記』などに登場する。ヤマトタケルの東征の際、ヤマトタケルは、走水の海（浦賀水道）で海神の怒りを招いてしまった。荒れ狂う海を前にして、海神の怒りを静めるために弟橘媛が海に身を投じたところ波が穏やかになった。媛をしのいだヤマトタケルの「吾妻はや」ではじまる歌は、「あずま」地名の起源となったとも伝えられる。この弟橘媛を祀る神社は、千葉県茂原市本納の橘樹神社、神奈川県川崎市高津区子母口の橘樹神社、神奈川県二宮町の吾妻神社、神奈川県横須賀市走水の走水神社、愛知県名古屋市熱田区の熱田神宮などがあるが、先述の大洗町の天妃神社などは、典型的な天妃信仰と弟橘媛信仰との混淆であると言える。この神社は水戸光圀が元禄3年に創建したものであるが、1831年（天保2）に徳川斉昭によって引き上げられた天妃像（現存しない）が祀られ、祭神を弟橘媛としたと伝えられる。したがって現在の神社名は天妃山・弟橘姫神社で旧天妃神社とするのが通例である。さらに現北茨城市の磯浜天妃山の弟橘姫神社も、類似の伝承を持つ。この神社は1690年（元禄3）に創建されたが、大洗町の例と同様に、徳川斉昭が天保2年、天妃像に変えて祭神を弟橘比売命としたが、住民の反対運動が起こったと言われる。江戸時代末期の国粋主義の高揚に従って媽祖を船玉神とする信仰が次第に姿を消していった事実と相似した現象であると理解できるのである。

（2）天妃の標高と海岸線

繰り返しになるが、媽祖信仰、天妃信仰については藤田明良氏を初めとする重厚かつ詳細な研究がすでに蓄積されている。それゆえ付け加えるべき新たな研究の視点を指摘することは一見困難である。ところがあえて言うならば、既往の研究に歴史地理学的視点を投影することによって、別の側面が見えてくるのではないか。以下、ごく単純ではあるが、天妃信仰の水平的分布と垂直的立地について述べたい。

天妃信仰の分布を1：25000地形図上で確認した結果をまとめたのが図2「1：25000地形図上に見る天妃信仰の立地」である。ただし、この図に示された天妃宮や天妃像の立地に関しては、必ずしも本来の位置ではない。すなわち元の施設に祀られていた天妃像がそのまま現地にとどまっている場合もあれば、別の場所に移されて収蔵されている場合もあるからである。

藤田氏によって確認されている38件のうちで、基本的には元の位置に祀られていて地形図でもその位置を示したものは、沖縄県久米島町の天后宮、鹿児島県の加世田益山・寺園家と加世田小松原・中村家の2例、大分県臼杵市の野津町筒井・赤嶺家のもの、長崎市の寺町・興福寺の2例、同鍛冶屋町・崇福寺の2例、同館内・旧唐人屋敷・天后堂の3例、平戸市川内・観音堂、宮城県七ヶ浜町松ヶ浜・吉田家の旧御殿崎稲荷神社の例、茨城県水戸市八幡町壽昌山祇園寺、大洗町磯浜天妃山、北茨城市磯浜天妃山・弟橘姫神社すなわち旧天妃神社、小美玉町小川・旧天聖堂墓地内、大間町大間・稲荷神社の例である。また長崎市筑後町・福濟寺と玉園町・聖福寺の3例は長崎歴史博物館に付託されているが図では寺の位置を示している。

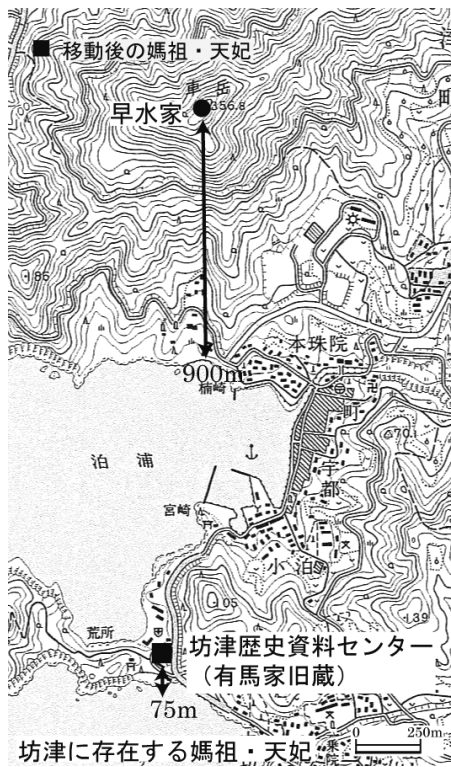
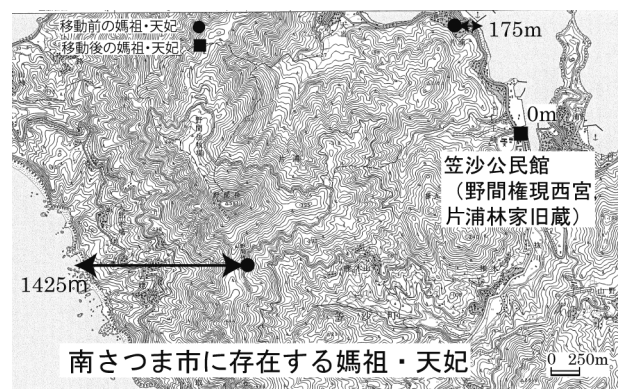
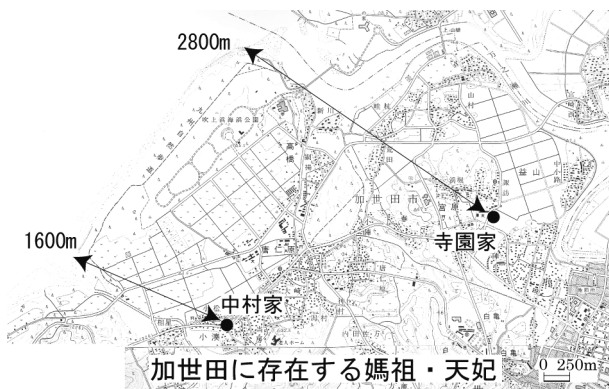
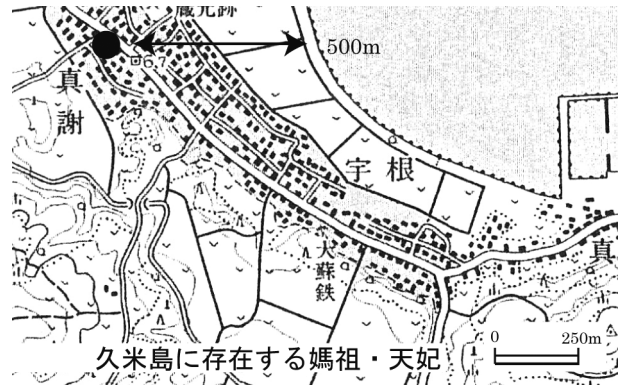
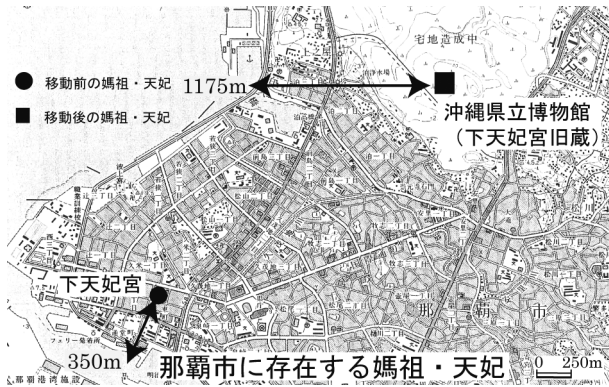


図2 1: 25000地形図上に見る天妃信仰の立地 (A)

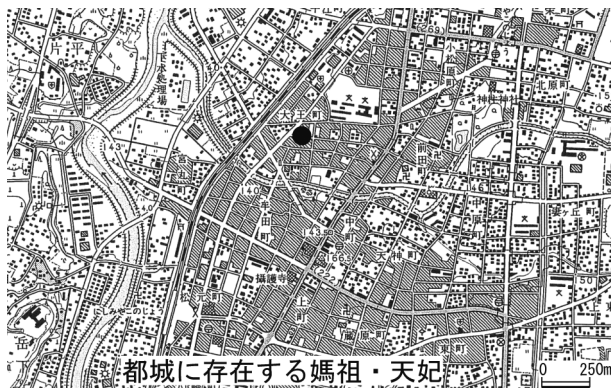


図2 1: 25000地形図上に見る天妃信仰の立地 (B)

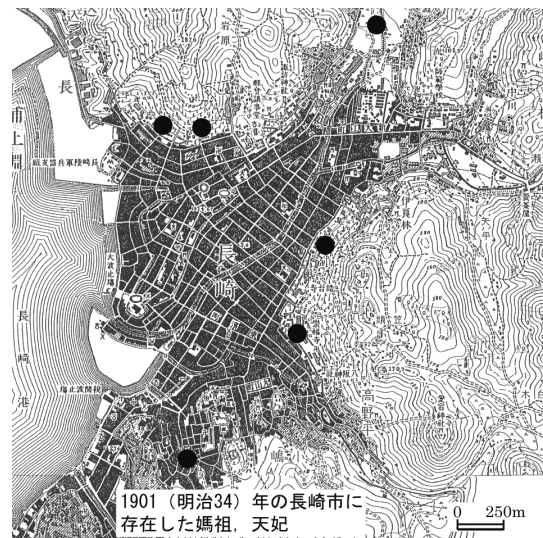
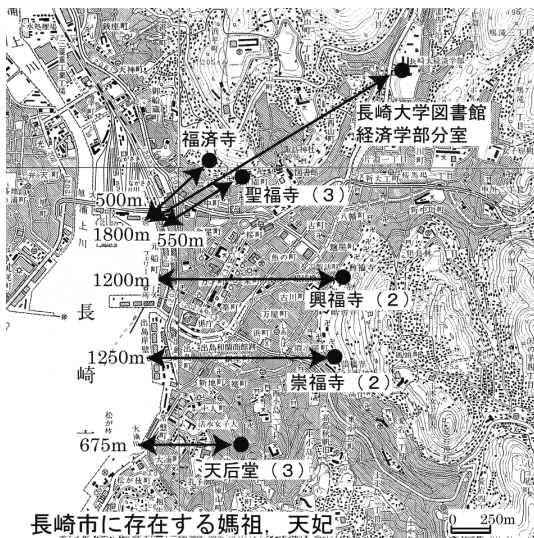
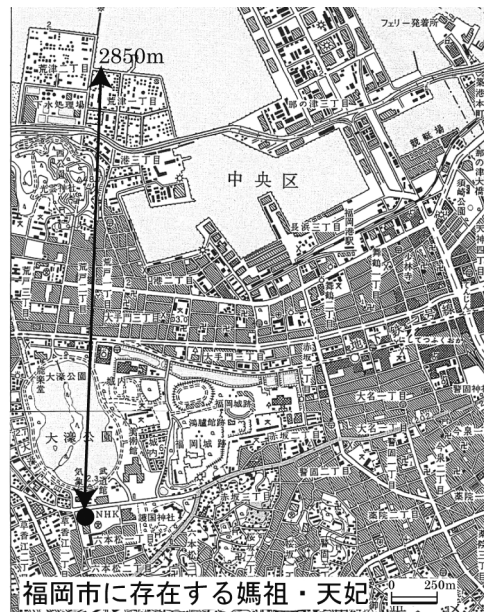
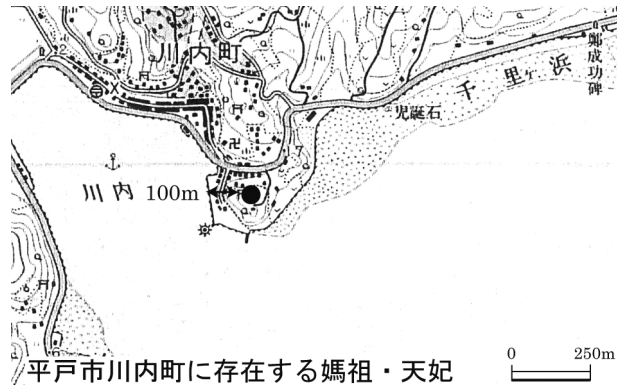


図2 1：25000地形図上に見る天妃信仰の立地（C）

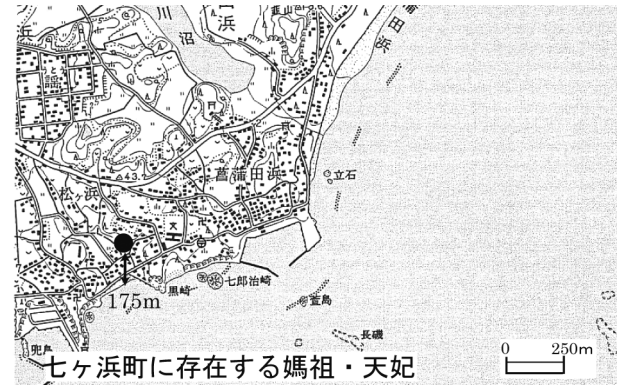
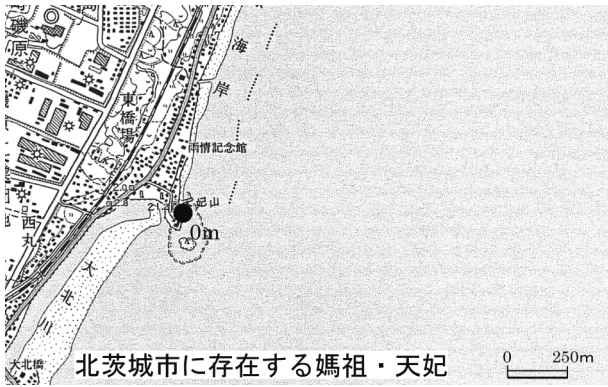
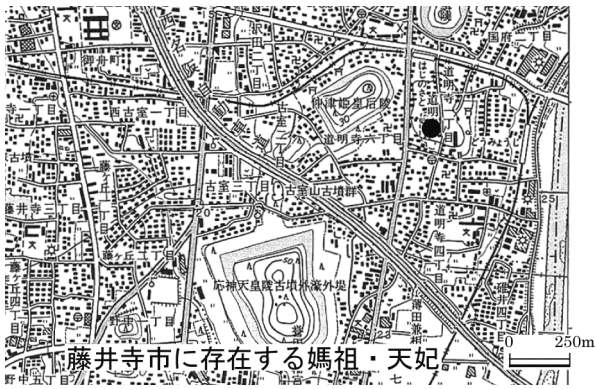


図2 1:25000地形図上に見る天妃信仰の立地(D)

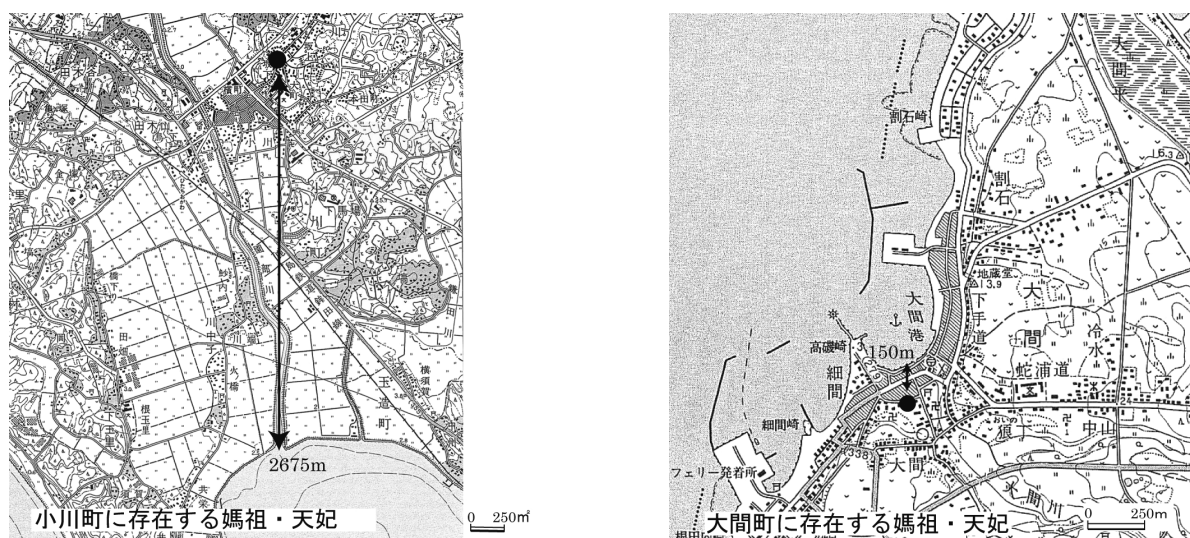


図2 1：25000地形図上に見る天妃信仰の立地（E）

さらに、厳密には像が移されているが、ほぼ近隣の場所に所在していると考えられる事例は、鹿児島県南さつま市の旧野間権現社西宮・廃仏毀釈で片浦林家に移され笠沙公民館にある例、笠沙公民館・片浦・林家旧蔵、坊津歴史資料センター輝津館・坊津泊・有馬家旧蔵、坊津・早水家、いちき串木野市の島平・照島神社旧蔵、現南九州市穎娃町・穎娃歴史資料館の石垣・浜田家旧蔵、旧高山町後田・林家（同家はもとは旧唐人町の本町に居住）、霧島市の国分・林家旧蔵（現在不明）、宮崎県の宮崎市の清水・松井家、都城市の大王町天水気・市教育委員会、長崎県平戸市の岩の上町・最教寺の2例（安溝岳にあったが廃仏毀釈で最教寺に移された）である。

さらに、元の場所からはかなり離れた別の場所に保管されているものとして、長崎大学図書館、九州大学附属図書館、藤井寺市の道明寺八幡宮（国分の旧家が寄進したもの）がある。

那覇市の県立博物館所蔵の例は、元の下天妃宮の場所と県立博物館の両方の位置を示している。ただし藤田氏の論文には古媽祖像という制約があって収録されていないが、後述のように本稿で重要な意味を持つ唐栄久米村の上天妃宮を無視することはできない。この図には藤田氏の調査との整合性を勘案して記載していないが、これについては後述することにした。

以上、1：25000地形図上で確認した天妃像（天后像、媽祖像）あるいは施設の位置について、その標高と海岸線からの直線距離を示したのが表1「天妃の標高と海岸からの距離」である。もっとも1：25000地形図上での概測であるから、数値自体はそれほど正確なものではない。ただし概要を把握するには大過はないであろう。

表1では、下段から順次上段に進むにつれて、標高位置が高くなるように配置している。38件のそれぞれの標高を単純に平均してみると、46.6m、すなわちほぼ50mということになるが、この数値自体にそれほど意味がないことは言うまでもない。むしろ標高50mよりも低地に38件中の34件が所在することに注目すべきであろう。しかも34件のうち、3mが1件、5mが3件、10mが9件というようにきわめて低い標高位置に所在している事例が多く、実感からすれば海水面に近いと思われる場所にほと

表1 天妃の標高と海岸線からの距離

鹿兒島県南さつま市坊津泊・早水家	356.8m	900m
鹿兒島県南さつま市笠沙公民館（旧野間権現西宮）	350m	1425m
宮崎県都城市大王町（天水気・市教育委員会）	145m	×
大分県臼杵市（野津町筒井・赤嶺家）	110m	×
長崎県長崎市館内（旧唐人屋敷・天后堂）	50m	675m
長崎県長崎市館内（旧唐人屋敷・天后堂）	50m	675m
長崎県長崎市筑後町・福濟寺	50m	500m
長崎県長崎市長崎大学図書館	40m	1800m
長崎県長崎市玉園町・聖福寺	40m	550m
長崎県長崎市玉園町・聖福寺	40m	550m
長崎県長崎市玉園町・聖福寺	40m	550m
茨城県水戸市（八幡町 壽昌山祇園寺）	30m	×
長崎県長崎市鍛冶屋町・崇福寺	30m	1250m
長崎県長崎市鍛冶屋町・崇福寺	30m	1250m
長崎県長崎市寺町・興福寺	30m	1200m
長崎県長崎市寺町・興福寺	30m	1200m
鹿兒島県南九州市瀬尾町(瀬尾歴史資料館、石垣・浜田家旧蔵)	30m	1075m
長崎県平戸市川内・観音堂	30m	100m
鹿兒島県肝付町（高山後田・林家）	25m	×
茨城県大洗町(磯浜天妃山、現存せず)	25m	50m
大阪府藤井寺市（道明寺八幡宮）	20m	×
茨城県小美玉町(小川・旧天聖堂墓地内)	20m	2675m
鹿兒島県南さつま市 笠沙公民館（片浦・林家旧蔵）	20m	175m
鹿兒島県南さつま市 坊津歴史資料センター輝津館（坊津泊・有馬家旧蔵）	20m	75m
鹿兒島県霧島市（国分・林家旧蔵）	10m	3675m
鹿兒島県南さつま市加世田益山・寺園家	10m	2800m
鹿兒島県南さつま市加世田小松原・中村家	10m	1600m
長崎県平戸市岩の上町・最教寺	10m	600m
長崎県平戸市岩の上町・最教寺	10m	600m
沖縄県久米島町天后宮	10m	500m
宮城県七ヶ浜町(松ヶ浜・吉田家 旧御殿崎稻荷神社)	10m	175m
茨城県北茨城市（磯浜天妃山・弟橘姫神社）	10m	0m
鹿兒島県いちき串木野市（島平・照島神社旧蔵）	10m	0m
宮崎県宮崎市（清水・松井家）	5m	4000m
沖縄県那覇市（県立博物館）元は下天妃宮	5m	350m
青森県大間町（大間・稻荷神社）	5m	150m
福岡県福岡市（九州大学附属図書館）	3m	2850m

んどの天妃像が祀られていると言ってよい。ただし海岸線との距離という点では、標高が低いにもかかわらず、意外にも直線距離が離れている事例も多く見られる。標高が50m以下の例でも、海岸線にごく近接しているものもあれば、数百メートル、場合によっては1 km以上も離れているものもある。しかし大枠から見れば、海岸線から距離こそ離れてはいるものの低平な平野であって海に近いというイメージをさほど逸脱しない事例が多いということ是可以する。このような「海に面している」あるいは「海に近い」もしくは「海が近い」場所に多くの天妃像が祀られているという事実は、媽祖（天妃）は航海神であるということが、やはり強く認識されていることを物語っている。

ところが、一方では、「海から離れた」場所、「海よりかなり高い」場所に祀られている事例も存在している。東日本の例が、本来の海との近接性を守っていて航海神としての意識が強いのに対して、むしろ中国や琉球と近い鹿児島県・宮崎県・大分県・長崎県に、航海神としての認識の希薄さが顕著であることが注目される。媽祖や天妃が、ごく身近に在ったこれらの地域においては、かえって本来の意味、思想が薄められてしまうという傾向があるのではないか。たとえば、図2のうちの長崎市の媽祖・天妃を見ればこのことがよく理解できる。長崎市には12件の媽祖（天妃・天后）があるが、後述の唐人屋敷地区（館内）の天后堂は、まぎれもなく航海神として崇拝されていると考えてよい位置に立地している。ところが残りの媽祖像を祀る、あるいは祀っていた寺町・興福寺、鍛冶屋町・崇福寺、筑後町・福濟寺、玉園町・聖福寺は、図2の「長崎市に存在する媽祖、天妃」を見ると、いかにも「海」を志向しているように思われるが、同図の「1901（明治34）年の長崎市に存在した媽祖・天妃」を見ると、当時の長崎市街地を取り囲むかのような位置にあることがわかる。明治年間の長崎市街地は、基本的には近世の長崎市街地であると言ってよい。したがってこれらの寺に祀られた媽祖、天妃は、「航海神」すなわち「航海に従事している人たち」を守ってくれる神というよりも、「航海に大きく依存している長崎の町」を守ってくれる神、ひいては「航海神」としての意識が次第に希釈されていって、「長崎の町と人」の守り神として認識されるようになったと解釈してよいのではないか。本来の限定された意味から、敷衍して広がった意味が一般化していく現象は、この事例のみではないように思われる。

以上のことは、あくまでもさほどの根拠に裏付けられたことではないが、あらゆる文化の「交流」、 「伝播」、 「拡散」、そして「交渉」においても想定できることではないだろうか。

（3）石敢當の伝播・拡散との比較

筆者は先に伝統的地理観による地理的表象たる「石敢當」が、中国から琉球さらに日本の各地に伝わったことを論じた⁴⁾。本稿で取り上げている「媽祖」、 「天妃」、 「天后」もまた、石敢當と同様に、東アジア世界や東南アジア世界の海を渡って、各地に根付いていったものである⁵⁾。両者の起源や意味合いは大きく異なっているが、伝播や拡散という点からすれば、ある意味では同じ舞台上で議論してもよ

4) 高橋誠一「石敢當と文化交渉—奄美諸島を中心として—」（関西大学文化交渉学教育研究拠点『東アジア文化交渉研究』創刊号、2008年3月）、159-177頁。

5) 石敢當に関して、従来その存在があまり知られていなかったベトナムにおいても、2007年にハノイで実見することができた。漢字教育が盛んでないベトナムでは地元の住民の石敢當に関する理解は顕著ではないと言ってよい。

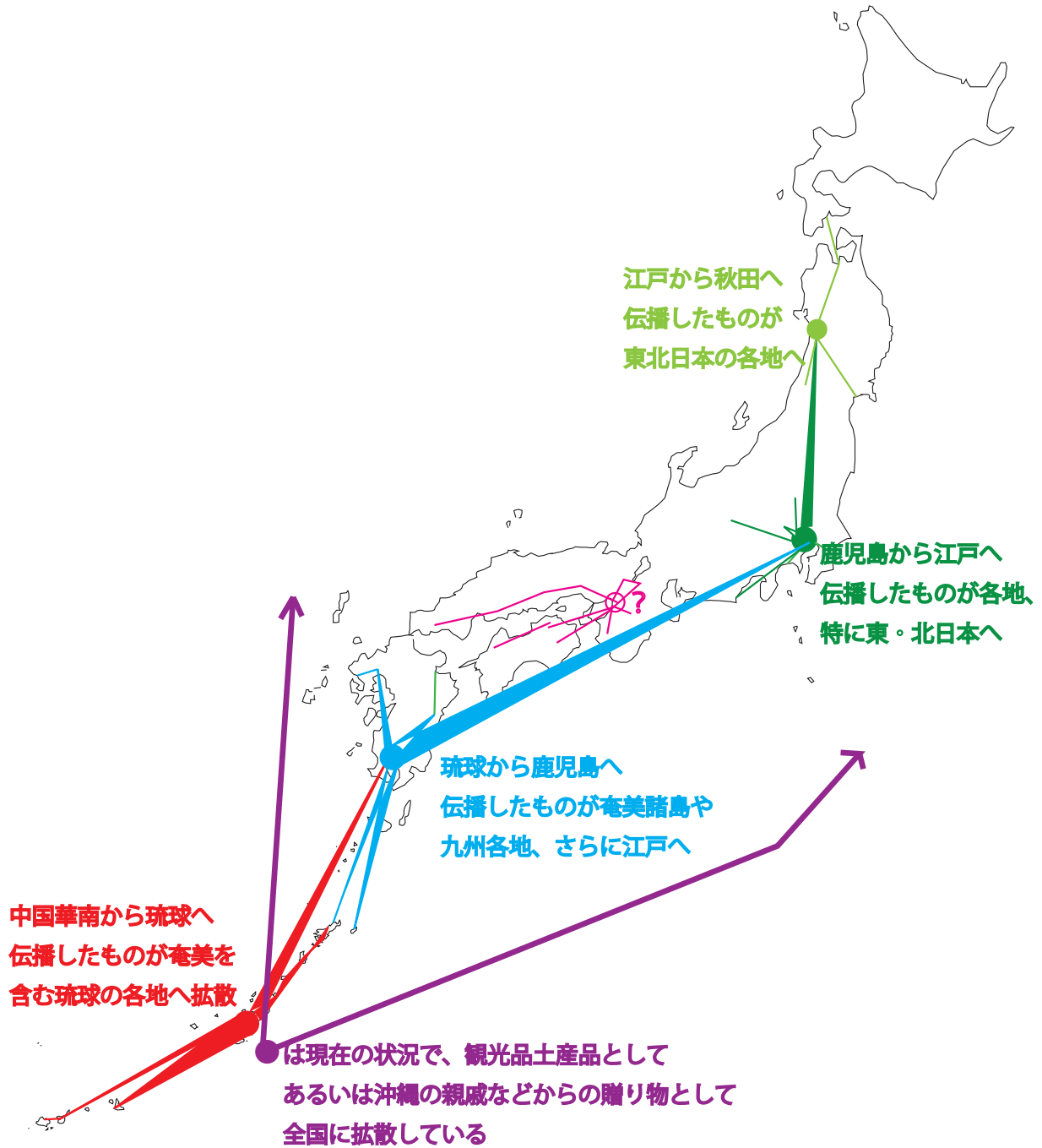


図3 石敢當の伝播・拡散

いのではないかと思われる。先に示した図1「日本所在の古媽祖像一覧」と図3「石敢當の伝播・拡散」を合わせ考えることによって、文化現象の伝播と拡散についての考察を試みたい。

中国では古くからT字路や四差路は百鬼の横行する場所と考えられ、魔除けなどとしての石敢當が設置されることが多く、8世紀後半には石敢當を立てる風習が広がり、福建省地方を経て、琉球や東南アジア諸地域に伝播したと考えられている。琉球には、15世紀の半ば頃に伝来したとされ、さらに16世紀末には日本に至り、北は秋田、青森、さらには北海道にまで広がっていったとされる。日本における石敢當に関する研究は、これまでも数多く蓄積されているが⁶⁾、広域にわたる精力的な調査・研究者として特筆されるべきは、小玉正任氏と久永元利氏である。小玉正任氏による研究成果は、2冊の大部の著書にまとめられている⁷⁾。この著作は、各種の文献史料を渉猟して石敢當の起源や系譜を検討するとともに、いわば石敢當同好者からの情報を集めて、日本における石敢當の分布と実態についての詳細な調査報告を収録したものである。また、久永元利氏は大阪市淀川区の加島で食堂を経営するかたわら石敢當を調査・研究、特に奄美諸島などにおいて石敢當を悉皆的に調査、詳細な地図の上でその設置場所・個々の大きさと形状、推定年代、石材、刻字、設置家屋の名前などを克明に記録した報告書を作成しておられる⁸⁾。なお沖縄県内における石敢當に関しては、筆者も那覇市首里地区と壺屋地区で、現地調査を実施した⁹⁾。

以下、主として小玉氏の研究によって、日本における石敢當の分布を概観すると、2004年4月現在、全国29都道府県で石敢當の存立が確認されている。最も多いのは沖縄県で1万基を超えるとされる。ついで多いのは鹿児島県で奄美諸島を含めて1000余基がある。これにつぐのが宮崎県の94基であって、琉球との関係の深かった鹿児島県に隣接している地域であることを考慮に入れば、ごく当然のこととも思える。ところが、宮崎県に次ぐのが、秋田県の38基、徳島県の13基、大阪府の11基、佐賀県の9基、東京都の8基、神奈川県・千葉県の各2基、大分県・愛媛県・山口県・岡山県・奈良県・滋賀県・静岡県・栃木県・山形県・北海道の各1基となっている。これらのことから石敢當の分布については、ある種の特徴を指摘しうる。沖縄・南九州に濃密に存在し、北は北海道の函館まで散在しているにもかかわらず、山陰・北陸・越後の日本海側には全く見当たらない。ところが、山形・秋田・青森には古い石敢當が存在し、とくに秋田には38基（かつては47基あった）と本州でもっとも多く設置されている。また、四国の徳島には13基（かつては27基）あるが、中国との文物の交流拠点である福岡・長崎に

6) たとえば窪 徳忠氏の一連の研究などがある。これら石敢當の研究については、後掲の小玉正任氏の著作に詳しい。

7) 小玉正任『石敢當』、(琉球新報社、1999年6月)、1-342頁。小玉正任『民俗信仰 日本の石敢當』、(慶友社、2004年12月)、1-473頁。

8) 久永元利『石敢當探訪 第一集 喜界町編』、(雪屋書房、1989年11月)、1-84頁。久永元利『石敢當探訪 第二集』、(雪屋書房、1991年7月)、1-167頁。第一集は喜界町役場から、第二集は沖永良部郷土研究会会長の先田光演氏に提供いただいた。また2006年6月に、久永氏に直接面談し、種々のご教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。

9) 高橋誠一「琉球における石敢當—那覇市首里地区を事例として—」、(古今書院、千田稔編『アジアの時代の地理学—伝統と変革—』所収、2008年3月)、17-32頁。高橋誠一「那覇市壺屋地区における石敢當と集落形態」、(関西大学アジア文化交流研究センター『アジア文化交流研究』第3号、2008年3月)、7-23頁。

石敢當の影が薄い。これに関して、小玉氏は、秋田・埼玉・長野県などのものは、おそらく、儒学者による知識によって主として江戸から広がっていったのであろうと推定している。ただし、埼玉や秋田、長野などへの伝播について、江戸から発信されたものと解釈することについて異論はないが、中国の文献によって学んだ儒学者の知識のみで各地に広がっていったとすることについては、議論の余地があるように思われる。すなわち、中国から琉球へ伝わり、さらに薩摩を経由して江戸へ伝わった諸文化は、他に多く認められる。また近世の琉球ブームというようなこともあわせ考えると、江戸への伝来については、やはり琉球を無視することは適切ではないように思われるからである。

そこで筆者は、かつては琉球に属していた奄美諸島を中心として石敢當の分布を検討したが、喜界島における異常なまでの石敢當の稠密さなど、いくつかの注目すべき事実を確認できた。その結果を取り入れて、日本における石敢當の伝播と拡散について、以下のような考察をした。

石敢當の伝播と拡散に関しては、最も重要な流れとして中国ことに福建などから琉球へのルートを考えるべきであろう。この場合、中国南部から八重山・宮古を経て沖縄島に伝わったとするよりも、当時としては最新の地理観である風水思想の一環として、琉球国の中心である沖縄島、それも唐栄久米村を発信基地として首里や那覇に伝わり、しかるのちに琉球国内へと拡散していったと考えるのが自然である。宮古・八重山へは、方向としては逆の流れを想定できる。さらに琉球国の支配下にあった奄美諸島へも広がっていった。沖縄島に近い与論島や沖永良部島を経由して、徳之島や奄美大島へ伝わり、さらに近隣の喜界島や加計呂麻島へも、部分的には伝播したことも想定できる。しかし鹿児島への伝播としては、沖縄島から奄美諸島を順次北上して、鹿児島へ伝わったということは考えがたい。むしろ鹿児島(薩摩・大隈地方)へは、鹿児島藩の琉球支配の結果として、首里・那覇から直接的に伝わったと考えられる。さらに江戸へも鹿児島藩から伝えられ、さらに江戸を発信基地として、全国なかでも東日本や北日本に拡散していったとも推定できる。ただし西日本に関しては、鹿児島から宮崎などの九州地方への拡散は確実であろうが、近畿地方における広がりについては慎重に考える必要がある。すなわち鹿児島から江戸への伝播過程で、たとえば琉球使節の江戸上りの途次に広がっていった可能性もあろうし、四国ことに徳島などから大坂へ伝わり、大坂から近隣の地域に拡散していたということも想定できる。筆者が前著論文で特に強調したのは、琉球から鹿児島へ伝わり、逆方向に奄美諸島に広がっていったという事実であった。要するに、文化交流や文化交渉について議論する場合、往々にして、一方向的な伝播過程とルートのみが強調される。しかしこれらの流れに関しては、一方向的な流れのみで解釈できることは、むしろ稀であり、双方向的というよりも多方向的かつ交錯的なものとして理解すべきであろう。

さらに言えば、石敢當のように少なくとも中国においては唐時代にまで遡りうるようなものについても、現代に至るまでの、時間枠を長く設定したうえでの検討が必要である。古い伝統に端を発する石敢當であるとは言っても、現在もなお生き続けているのであって、なお日常的に変容を遂げつつあることを強調しておきたい。

伝統的な地理思想の一環である石敢當が、現在も生き続け、かつ新しい変身を遂げつつあるのと同様のことは、媽祖信仰、天妃信仰の場合にも指摘できる。たとえば、神奈川県横浜市における「横濱中華街」の「横濱媽祖廟」の建立などは、その典型的な例である。筆者は直接調査したわけではないが、「横

濱中華街－横濱媽祖廟」のホームページ（2005年7月）によれば、140年前には清国領事館と関帝廟内に媽祖が祀られていた記録が残っていて、20年前より海の女神である媽祖廟の建立を望む声が強かったこと、たまたまマンション建設の計画が持ち上がったが街づくりの観点から反対運動が起こり、土地を買収して、媽祖廟建立が決定されたことが述べられている。なおこの際、香港から招聘した風水師によって風水学上からも素晴らしい土地であるとの判断がなされたことも記されている。廟内には、天上聖母（媽祖）、順風耳、千里眼、玉皇上帝、福德正神が祀られているが、媽祖、天妃が、単なる航海神ではなく、あらゆる靈驗をもたらしてくれる神として崇拜されていることが注目される。

彼女は小さいころから念仏を唱え、16歳で神から教えと銅製の札を授けられ、神通力を駆使して海を渡り、雲に乗って島を巡回し、悪や災いをしりぞけ、病を癒し、「通玄の靈女」と呼ばれるようになり、28歳で修行を終えて天に召されて後も、赤い衣装をまとうて海上を舞い、難民を救助したことなどがホームページにも記載されている。さらに媽祖は航海を護る海の神様としてのみならず、自然災害・戦争・盗賊から人々を護る女神様として、現在でも中国大陸・台湾はもとより、華僑が住む世界各地で信仰されていると述べられる。さらに、「生活様式が全く異なる諸外国に移り住み、その地の人々や環境と融合しながらも伝統文化を崩さずに、確固とした立場で地域社会の繁栄の一翼を担う華僑にとって、「媽祖」は心のよりどころとなっています。」という文章は、航海神としての媽祖が「家内安全、商売繁盛、心願成就、開運成就、身体健全、社運隆昌、交通安全、旅行安全、合格祈願、安産祈願、息災延命、良縁成就、無病息災、除災招福」（以上、ホームページ）の、まさに万能の神として変身・成長していたことを如実に物語っているのである。

第三章 天妃・天后 of 舞台とその変貌—むすびにかえて—

（1）唐榮久米村の天妃宮

前述のように、日本における媽祖、天妃信仰は、時代や地域あるいは伝播と拡散の違いによって、さまざまな様相を示している。祀られている場所・位置も、地形図などで検証したように、いわば本来の立地とはかなり逸脱した立地を示している例も多い。

しかし、琉球や日本へ伝来した当初は、航海神としての立地を示していたと思われる。もっとも媽祖信仰の原点である中国においてさえ、時代がくだるにしたがって、海とは直接関係の場所に祀られていく事例も多いと考えられるが、たとえ発信源の中国で変容していたとしても、琉球や日本に伝わった当初は本来の場所が志向されていたと推定することに大過はないように思われる。

その最も典型的な例が、琉球の唐榮久米村における天妃宮である。

沖縄県那覇市の唐榮久米村には、かつて上天妃宮と下天妃宮の二つがあった。造られたのは15世紀初めの永楽年間と伝えられる。しかし、廃藩置県以降は、尋常小学校や師範学校の敷地として使われるようになった。上天妃宮の跡地は1899年（明治32）には、天妃尋常高等小学校として使用されるようになり、戦後の一時期是那覇市役所ができるまで市役所として使われていた。現在は、天妃小学校の東南角に上天妃宮の石門のみが残されているに過ぎないが、1977年には那覇市の文化財に指定されて保存がはかられている。いっぽう下天妃宮の敷地には、1880年に師範学校が造られたが、この場所は現在の西消

防署・東町郵便局付近に相当する。このような明治以降の諸施設の建設の結果、琉球時代の両天妃宮と天妃像は、若狭の天尊廟地内に合祀されるようになったが、これもまた沖縄戦で失われ、戦後、久米至聖廟とともに復興されるに至った。ところが今は波之上宮の南にある久米至聖廟（久米孔子廟）も、もともとこの地にあったわけではない。久米の孔子廟は、1671年に金正春城間親方が建立を尚貞王に申し出て許可を受け、1672年に泉崎橋頭の久米村に選定して着工、1674年に建物が竣工、翌々年の1676年に孔子と四配（顔子、曾子、子思子、孟子）の塑像が完成して、厚い信仰を集めるようになった。まさに唐栄久米村の正面入り口である「久米大門」を中心として、上下の天妃宮と対称的な位置に立地する唐栄久米村にとって最重要な宗教施設であった。しかし、この久米至聖廟（孔子廟）も沖縄戦で聖像や蔵書が焼失し、敷地にも旧軍道1号（現国道58号）が貫通してしまい、跡地での再建は不可能になってしまった。そこで久米崇聖会では、那覇市若狭の天尊廟敷地内に廟地を選定して復興工事に着手、1975年に至聖廟落成式を実施した。敷地内には、大成殿のほかに、明倫堂、天尊廟とともに天妃宮があるが、天妃宮の正面はほぼ南に向いている。ただこの南向きにどれほどの意味はあるのかについては疑問の点が多い。すなわちこの地からわずか150m北方には海が開けていて、海岸に向いているとはとても表現できない。もっとも本来の天妃が見守っていた方向、かつての天妃が向いていた唐栄久米村の正面の入江（唐栄久米村の船着場、港、シキバ）を守護していると理屈としては考えられなくもないが、敷地内の他の施設や祭祀像から見ても、天妃像だけがかつての入江の方向を志向しているとは考えがたい。

それでは、琉球時代の上下の天妃宮は、どのような立地を示していたのであろうか。現在の景観からは、当時の状況は到底理解できないのである。要するに、第二次世界大戦の沖縄戦によって、かつての唐栄久米村は壊滅的な破壊をもたらされた。琉球時代の歴史的景観は、根底から抹消されているのである。

そこで筆者は、琉球時代の繁栄していた唐栄久米村の景観復原を試みた¹⁰⁾。その結果はすでに前著において公表しているが、本稿では、上下の天妃宮を際立たせるための彩色などの改訂を施した。図4「唐栄久米村と天妃宮」である。この唐栄久米村の概要と図の作製過程について、簡単に述べておきたい。

久米村はかつての那覇の中心部の一角を占める地区であるが、かつては海上に浮かぶ島嶼群から成っていて「浮島」と呼ばれていた。上之蔵、辻、済広寺、波之上、上の毛、若狭町村・久茂地村・久米村に囲まれた一帯から内金宮に至る一帯が、「浮島」であった。その外側を囲む東村・西村・若狭村などは海であったが、砂礫の堆積作用によって連結された地区というように考えられている。那覇が開港場となったのは15世紀とされるが、1450年ごろの「琉球国図」（『海東諸国記』）には那覇港が「江南南蛮日本商船所」と記されており、宝倉（御物城）、国庫（親見世）、石橋（長虹堤）のほかに、九面里すなわちクニンダ（久米村）も記されている。さらに10年後の「朝鮮人漂流談」によれば、天使館、市場、天妃宮などもすでに存在していた。

この地域の整備と発展は、その後も引き続いて行われた。迎恩亭や唐船小堀も1534年の『陳侃使録』に記載されているし、天尊廟、龍王殿、美栄橋、崇元寺橋、イベガマ、長寿寺、聖現寺も第一尚氏の頃

10) 高橋誠一「唐栄久米村の景観とその構造」、(関西大学東西学術研究所『関西大学東西学術研究所紀要』第35輯、2002年3月)、1-37頁。高橋誠一『琉球の都市と村落』、(関西大学出版部、2003年9月)、1-393頁。



図4 唐宋久米村と天妃宮（高橋誠一（2003年）を一部改訂）

にすでに完成していた。また第二尚氏の尚真王の末年（1526年頃）には崇元寺，尚清王時代（1527～1555年）には屋良座城，三重城，護国寺，地藏堂，夷堂，尚寧王時代（1589～1620年）には袋中上人ゆかりの桂林寺も建設されていた。

薩摩侵略によって在番奉行所などの薩摩関係の役所が作られるが，17世紀以後も，この地域には，多くの施設が建設されていく。尚質王時代（1648～1668年）には辻と仲島に遊廓，尚貞王時代（1669～1709年）には孔子廟，尚敬王時代（1713～1751年）には明倫堂が孔子廟敷地内に設置された。

明治以降，久米とその周辺は急速な変貌をとげ，「西の海」や東町の海岸部や泉崎の海岸部は埋め立てられ，かつて海中の小岩島であった「仲毛」は陸化，仲島の大石も陸封されてしまった。さらにその東南辺も埋め立てによって那覇駅ができて旭町が形成された。ただしこれらの変貌にもかかわらず，史跡・名勝はほとんど原形をとどめていたが，1944年（昭和19）10月10日の空襲と1945年3月23日から始まった沖縄戦によって，ほとんどが灰燼に帰してしまった。しかも，1952年から始まった那覇市区画整理事業によって，かつての痕跡をとどめていた道路や街区は，完全に抹消されてしまったし，国場川河口部や海岸線も完全に作りかえられてしまった。

そこで筆者は，伊地知貞馨氏の「那覇及び久米村図」や嘉手納宗徳氏の「那覇市街図（明治初年）」，さらに那覇市文化局歴史資料室によって作成された「那覇地区旧跡・歴史的地名地図¹¹⁾」，旧版地形図（例えば陸地測量部参謀本部「那覇」，大正8年測図，同10年7月25日発行）や1936年（昭和12）発行の「那覇市全圖」（1:6000），那覇市歴史資料室に保管されている戦前の景観を示した「民俗地図」（久米¹²⁾とその周辺地域の数葉。久米，天妃，泉崎・湧田，辻，上之蔵，久茂地，東，大門前の図¹³⁾），1945年撮影の米軍空中写真などによって，図4の元になった復原図を作製したわけである。このような方法で作製した唐栄久米村の復原図によって，筆者は，唐栄久米村は，道路の形態（屈曲，四辻の欠如など），林による圍繞，宗教施設などの立地，地形の傾斜，河川と湛水池の実態などからして，当時の最新の地理観であった風水思想を重要な基本理念として建設・経営された人工的に創出された風水の空間であり，まさに中国から伝来した風水地理観の琉球における発信基地であり，貯蔵庫であったことを論じたわけであるが，いずれにしてもこの唐栄久米村のプランの中に占めている上下の天妃宮の重要性は，きわめ

11) 那覇市文化局歴史資料室『那覇市旧跡・歴史的地名地図』（1:6000）のうちの1葉，1998年3月。

12) このうち久米については，A「戦前（昭和6～7年想定）の久米・天妃町民俗地図（西部，東部）」（具志堅以徳・高嶺明敏・新垣沢正・具志良翰・安仁屋維垣・国吉有慶の各氏で記入，1976年3月24日に糸嶺篤忠氏が宗家記入）と，B「戦前（大正6年頃）の久米町民俗地図」（池宮城国珍氏作成原図，作成年不記入）の2葉がある。

13) 久米以外の図のタイトル及び作成者等は以下の通りである。「戦前（昭和6年頃）の泉崎・湧田民俗地図」（古波鮫唯廉氏と崎間麗進氏の資料をもとに高里政彦氏作成，1989年7月1日），「辻遊郭之図」（終戦直前，那覇警察署が遊郭取締りのために作成したものをもとに西平守模氏と具志堅以徳氏が記入，1975年12月11日），「戦前の上之蔵民俗地図」（1976年4月24日崎浜秀雄氏記入，1976年5月嶋袋全峯氏記入），「戦前（大正10年頃）の久茂地村民俗地図」（池宮城永錫氏作成，1975年10月6日），「戦前（昭和3年頃）東町民俗地図」（仲宗根宗温氏，1975年11月，山田有邦氏昭和15年頃，1976年3月4日，東町に関しては他に1枚の地番図があってそれにも居住者名などが記載されているが1975年11月受という注記があることから，この東町民俗地図の原図であった可能性が高い），「戦前（想定昭和10～15年頃）の大門前民俗地図」（松村興勝氏作成，作成日の記載なし）。これらは那覇市歴史資料室の田名真之氏から提供いただいた。

て顕著であると言ってよい。唐栄久米村にとって最も大切な門である久米大門の西側に、下天妃宮と上天妃宮は南北に連なっている。この位置は先にも述べたように、大門の東側にある孔子廟と好対照の位置にある。また下天妃宮は船着場から350m、上天妃宮も500mの至近距離の位置にあった入江に直面しているのである。航海神の位置としては、きわめて適切な場所が天妃の舞台であった。

（2）長崎唐人屋敷地区の天后堂

鎖国時代において、日本と外国との貿易の唯一の窓口であった長崎には、幕府によってオランダ人居留地である出島、唐人居留地である唐人屋敷が設けられていた。このうち唐人屋敷地区は、現在の館内町のほぼ全域に及び、面積約9400坪、周囲を練堀、水濠や空堀、また外側の道路と竹垣で囲われていた。唐人たちはその出入りをも含めて、厳重に管理されていたが、地区の内部は次第に旧来の日本風から中国風の空間へと塗り替えられていった。

1784年（天明4）の大火で関帝廟を残して全焼したが、この後、唐人は自前の建物の建築を許されるようになった。寺町に残る興福寺境内の旧唐人屋敷門は、この大火後に建てられた住宅門とされる。現在、地区内に残る遺構としては、土神堂、観音堂、天后堂と、1897年（明治30）に建てられた福建会館などがある。

1698年（元禄11）の大火で五島町や大黒町にあった中国船の荷蔵が焼失したために、倉庫地区への目が届きやすいように、唐人屋敷地区前面の海が埋め立てられて、中国船専用の倉庫区域が造成された。この地区が、新地と呼ばれて、中国風の店舗が建ち並んで著名な観光地となり、毎年、1月下旬から2月上旬にかけて開催される「長崎ランタンフェスティバル」の主要な会場の一角となっている。この「長崎ランタンフェスティバル」では、中国獅子舞、中国雑技、中国ランタン装飾展示、中国皇帝パレード、太極拳、胡弓演奏、琉球國祭り太鼓エイサー、さらに龍踊り（じゃおどり）などが演じられるが、なかでも「媽祖行列」は、祭りのシンボルともなっている。この媽祖行列は、長崎に入港した唐船の乗組員たちが、江戸時代に実際に行っていた行列で、媽祖を唐人屋敷の天后堂や興福寺の媽祖堂に安置するまでの行列を再現したもので、通常は2度にわたって行われる。一日目は孔子廟～唐人屋敷～湊公園～観光通りアーケード～アルコア中通り～眼鏡橋～興福寺のコース、二日目は興福寺～眼鏡橋～アルコア中通り～観光通りアーケード～湊公園～唐人屋敷～長崎全日空ホテルグラバーヒルのコースなどが設定されている。

現在の唐人屋敷地区は、長崎港の出島岸壁から約500m、松ヶ枝埠頭東の大浦の海岸線から約675m内陸に位置しているが、かつてはもっと海岸近くにあった。すなわち、唐人屋敷地区北端に近接した広馬場商店街に接して海岸線が入り込んでいた。現在の新地中華街や湊公園は海の中であり、現築町電停に接しても海があり、その前方には出島が海中に設置されていた。したがって唐人屋敷地区は海に面していたと言ってよい。

この長崎唐人屋敷地区については各種の絵図が残されているが、残念ながら現在の正確な地図の上で、景観復原をしたものは存在しない。そこで筆者らは、歴史地理学の立場から、「長崎諸役場絵図」に描かれた唐人屋敷内の構造物などの位置を一つずつ現在の縮尺図上に投影していく作業によって、1800年頃の唐人屋敷の景観復原図を作製し、唐人屋敷の内部構造や都市プランについて検討した。図5

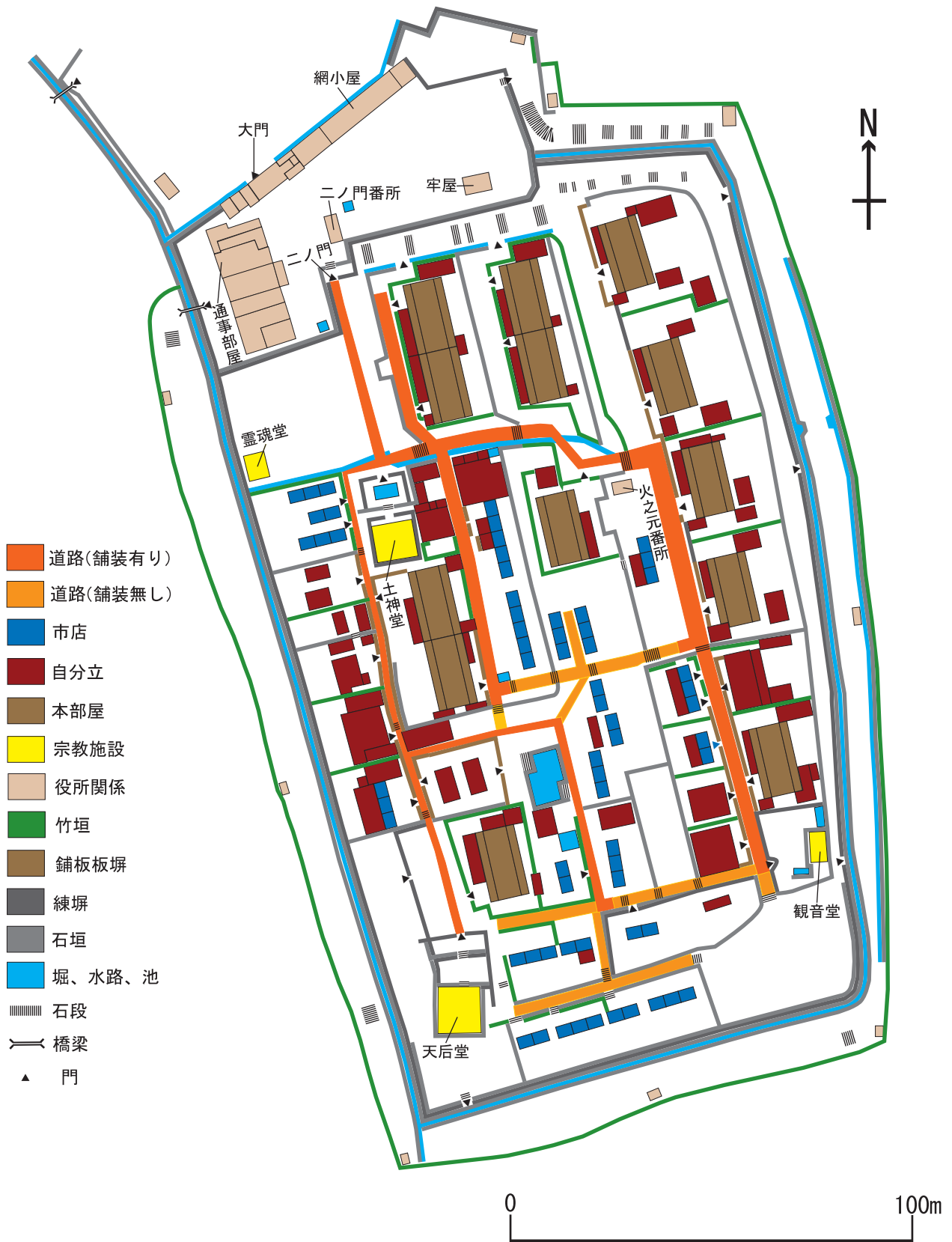


図5 長崎唐人屋敷と天后堂（岡本訓明・高橋誠一（2007年）を一部改訂）

「長崎唐人屋敷と天后堂」は、先に公表した図を彩色などの点で改訂したものである¹⁴⁾。

図5を見れば、長崎唐人屋敷地区の中で、天后堂が、いかに重要な位置に設置されたかが鮮明に浮かび上がってくるであろう。この天后堂は、1736年（元文元）に中国南京地方の人々によって天后聖母を祀ったのが起源と伝えられる。1790年（寛政2）に修復されたが、天后聖母の字が書かれた紅旗が掲げられていたと言われる。先述のように、1784年の大火災によって、唐館の大部分は灰燼に帰したが、天后堂のみが残されることになった（現在の建物は1906年（明治39）に全国の華僑の寄付によって建てられたもので、関帝も併祀していて関帝堂とも呼ばれている）。その後、唐人屋敷地区は大きく変容していった。土神堂を基点として天后堂と観音堂を結んで館内を一周する回路が明確に敷設され、幕府が建て渡した住居である「本部屋」や、中国人が自前で建てた住居である「自分立」、中国人の自前の店舗である「市店」の建設など、以前の長屋群を中心とした宿舍の集合体という状況とは大幅に異なったものへと変質を遂げていったのである。つまり、幕府からある意味では「お仕着せ」のものとして与えられた居留地区は、唐人の地理観と都市観に整合した都市的空間へと変質していった。

創設当初から幕末までの間に大きな変容を遂げてきた唐人屋敷は、居留地という枠を越えた、異国における中国の都市といったものに近いものとなり、中国において存在していたであろう空間構成の手法が、海を越えることによって、さらにまた幕府設営のものをベースにしたことによって、ある種の変容が生じた結果、日本にも中国にも存在しない、独特な景観が産み出されていったと理解してよい。

このような変化の中で、唐人屋敷地南端の地は、天后や観音を祀る聖なる空間として、また唐人の清遊の場として変化していった。天后堂と観音堂が崖上の道路で結ばれ、しかも後の時代の『唐館図絵巻』では「観音堂・天后堂ノ通路」と特に明記され、道の南側には木立に囲まれた閑静な家々が描かれていることなどからも、唐館にとっては新しい空間の創出であったと言ってよい。このような変容の中で、先に存在していた土神堂とあわせて3施設を結ぶ道路の整備、すなわち新しい町内の回路の形成が準備されていったわけで、石敷舗装された回路もしくは回廊が整備されていった。

天后堂が、唐人屋敷の都市軸の最重要な基点として設置されていることとともに、まさしく目の前に展開している海を正面の高台から見据えていることに、特に注目すべきである。この立地は、琉球の唐栄久米村における上下の天妃宮と完全に共通するものである。先述のように、長崎市の12件の媽祖（天妃・天后）のうちで、寺町・興福寺、鍛冶屋町・崇福寺、筑後町・福濟寺、玉園町・聖福寺のものが、「航海神」そのものというよりも「長崎の町と人」の守護神として認識されていたのとは、大いに異なると言ってよいであろう。

その点から、今一度、日本の天妃が祀られている舞台を見れば、「海」と「航海」に直結した事例と、本来の意味よりはもっと広がった理解、換言すれば「拡大・拡張された天妃」の舞台に分けて考えることが可能であるように思われる。

本来の「航海神」という限定された意味から、「あらゆることの守護神」へと成長していった天妃が在る。一方では、弟橘媛との混淆という事例も認められる。弟橘媛とのそれは、単なる混淆だけではな

14) 岡本訓明・高橋誠一「長崎唐人屋敷の景観と構造」、(関西大学アジア文化交流研究センター『アジア文化交流研究』第2号, 2007年3月), 7-29頁。

く、国粹主義の高揚と外来文化の否定という側面ももっていた。外来の文化と在来の文化との混淆であり、また相克でもあった。いわゆる「文化交渉」は、このような多面的な意味を含んだものであることを、より認識すべきであろう。

[付記]

本稿は、藤田明良氏の詳細な研究に多くを負っている。関西大学文化交渉学教育研究拠点事業推進担当者の二階堂善弘氏からは、資料収集を含めて教示をいただいた。さらに地形図上でのデータベース作製にあたっては、関西大学大学院博士課程後期課程（地理学専修）の松井幸一氏の協力を得た。ともに記して、心からの謝意を表したい。